

## 思弁的实在論の試練にかけられる脱構築？

——ヘグルンドのメイヤスー読解から——

吉松覚（パリ西大学 美学・比較文学専攻博士課程）

### 1. 相関主義者デリダ？

・メイヤスーの目的=われわれの認識にかかわらず存在する「絶対的なもの」の存在の肯定

→われわれが認識しないものの存在について思考しえない観念論を相関主義哲学とし、实在論を復興

→さらに相関の外にある「絶対的なもの」(ex. 物自体)について

- ・認識しえないが思考可能とする立場=弱い相関主義（カントなど）
- ・認識も思考も不可能とする立場=強い相関主義（ハイデガー、ヴィトゲンシュタインなど）

・デリダは相関主義者か？

デリダにおけるこのような「相関」

=「エクリチュール」？

(つねに純粋な直接性を不可能にする媒介としてはたらく「原エクリチュール」という概念として)

・デリダにおける出来事の問題

〈可能なもの〉(≡超越論的なもの)の外から到来する計算不可能なものとしての出来事

「歓待、贈与、赦し——そして何より、予測不可能性、「...かもしれない」、出来事についての「もし...だったら」[.....]。それらの可能性は、否定的ではない不-可能なものの経験として、つまりいずれは可能となるであろうもの、可能になろうとしているものの経験として、つねにその訪れを告げているのだ」(『精神分析のとまどい』109頁)

→この〈不-可能なもの〉は統制的理念のように目指されるものではなく、どのようなものか（少なくとも発生した当初は）認識できないが、それでもなお応答せねばならないもの

・メイヤスーの「宗教的なものの回帰」批判=強い相関主義と信の領域の関係の問題

「形而上学の終焉は、絶対者への権利要求の合理性を放棄した結果として、宗教的なものの激しい回帰という形をとることになった」(『有限性の後で』80頁、ヘグルンドもこの箇所を引いている)

→デリダも1990年代以降、信の問題をはじめとして概念化不可能だが存在はするものを思考していた

⇒以上三点から、デリダも相関主義者と数えられることは決して誤りではない。ただし、デリダは世界全体の徴候を同時代的に思考しており、宗教等を語るようになったのも世界的な隘路の反映であり、理論の瑕疵とは言い切れないことには注意が必要。

## 2. ヘグルンドのメイヤスー批判の要点(「RA」はすべて『ラディカル無神論』の日本語訳書ページ)

・唯物論者、「宗教への転回」批判者としてのヘグルンド、メイヤスー

「[メイヤスーの]仕事は崇敬や拒絶ではなく哲学的論議を誘う点で、看過しえない価値を持つ」(RA 402)

A・ホッジス『有限性の後で』と『ラディカル無神論』の対決を「唯物論の問い」として企図 (*ibid.*)

また双方とも「宗教への転回」を批判している (cf.前項)

・ヘグルンドが読む、メイヤスーの「絶対的なもの」=時間の力

→時間の絶対性は偶然性であり、神的なものの降臨と死者の蘇生の可能性をも含んでしまう

⇨ヘグルンドは①痕跡という論理構造②ラディカル無神論の論理の二つからこの思想に応答

・両者の差異=矛盾の扱い

メイヤスー：矛盾した存在者は「偶然性の全能性を台無しにする」(『有限性の後で』118-9)

ヘグルンド：「[矛盾をはらまない]存在者は、生成変化に必要となる「他性の次元」を取り去る」(RA 410)

→時間の継起をどう捉えるかの問題につながる。ヘグルンドは時間に内在する否定性が時間を流れさせる  
と考える。メイヤスーはある存在者を全く異なるものに生成変化させる潜在的な力として時間を捉える。

・時間の空間化/空間の時間化

=ヘグルンドはデリダにおける間隔化や差延、痕跡の概念について、時間が物質的支持体には書き込まれる  
という唯物的な理解を『ラディカル無神論』で提示。「継起に従っているものすべては痕跡に従っている」  
(RA 412)

・生命の発生の問題

メイヤスー：時間の潜在的な力によって非生氣的な物質が生命を帯びようになる (はじまりの単一性)

→メイヤスーは自身の無カラノ勃発説と神学的な無カラノ創造を区別するが、両者とも**非物質的**な審級を  
前提とすることになる。

ヘグルンド：デネットやステーテンの説を引きながら、生命の起源を点的でなく継起的な出来事に左右さ  
れることを主張 (RA 421)

→生き延び=存え [survival] の運動は生命/非生命にかかわらず、つねにすでにある

→では両者の違いは何か？

=生命は開放系として他のものを取り入れ、閉鎖系として自然的崩壊に抗する。生き延びへの配慮。

・メイヤスーにおける「配慮」の問題=神論で浮き彫りに

亡霊のジレンマ：「死者のためのもうひとつの生に絶望するか、そのような死を引き起こした神に絶望する

か」(メイヤスー「亡霊のジレンマ」より。RA 426でも引かれている)

⇨これに対してメイヤスーが示す解決策は、自然法則がいついかなるときでも変わりうるという自らの説に依拠する。そこから死者の蘇生可能性が導き出され、かつメイヤスーにおいて時間の継起は自然法則の偶然的消滅に左右されることはないということが読み取れる。

→逆行不可能な破壊が問題となることに

↓

ヘグルンドにおける生=死すべき運命、破壊可能性にさらされた生。

→亡霊性、変質=他化に取り憑かれていることが生成変化を可能にする。これが生。

・ヘグルンドの政治化=差別化。つねに決定不可能性に取り憑かれていて、この内在する矛盾が生条件

↓

メイヤスーの「脱政治化」=遍く救済すること。完全なる和解=完全なる死

### 3. ヘグルンドのメイヤスー批判への疑問

(1) 生き延びへの配慮が問題となるなら、存えるべく自らを変化させるものは生命なのか？

フィードバックにより自動で自らを变形したり、他のものを取り込んだりすることで残存しようとするコンピュータ・ウイルス等が今後出現したら、それはすでに一個の生なのか？

配慮という語の意味あい次第では生氣論(あるいは反転して物活論)に回帰してしまうのではないか？

→配慮という語が十分定義されていないのではないか。

(2) 放射性同位体の存え(cf. RA 422)について、相関主義者の考えではそれは「われわれに対してデータはそう言っている」としか言えないのでは？

この例では相関の外にある「絶対的なもの」を取り逃がしているのでは？

→メイヤスーの相関主義批判に真正面から応答していないのではないか。

(3) 時間の問題における両者のズレ

メイヤスーの言う時間とヘグルンドの言う時間(「大文字の《時間》のようなもの」、『有限性の後で』111頁)の議論の対象の水準の差、偶然性についてのズレもこれと並行している？

→ヘグルンド自身の時間論の問題か？

(『ラディカル無神論』における時制(とりわけ前未来と条件法現在)についての議論や、事後性の問題の不在。これらにより「痕跡」概念の射程が制限されたように思われる)

## 4. 本書から展開しうる論点の展望

### ・物質性の問題

ヘグルンドの痕跡理解はレヴィナスの痕跡概念を経由することなく、時間の空間化／空間の時間化が物質的支持体をもとになされるというもの。

cf. エクリチュールからさらに発展して、写真や映像、録音へのデリダの興味関心

→メイヤサーをはじめとした思弁的唯物論だけでなく、世界＝物質論を説くポヤン・マンチェフなどいわゆる「大陸哲学系」の潮流でも唯物論が復興しつつある。

三者はそれぞれ方向性を異にしているが、現代における唯物論の興隆は今後も注視する必要がある

### ・デリダの生命論と生氣論、物活論との関係

未公開のセミナー草稿「生死」の第4-7回講義におけるデリダのF・ジャコブ読解

ジャコブの『生命の論理』は、彼とともにノーベル医学・生理学賞を受賞したJ・モノーの『偶然と必然』と並んで、現代生物学における機械論的見方の優勢を告げ、形而上学的審級を措定する生氣論を批判。

→同講義でデリダはジャコブを一定程度評価しつつも、批判を加えている

デリダの最初期のサイバネティクスへの興味などとあわせてデリダの生命論への注目（F・ヴィターレら）

### ・ニーチェ、フロイト、ハイデガーとの比較研究、デリダと文学や言語の問いの不在

（訳者解説でも書いたが）本書の提唱するデリダ読解の根底にはデリダによるこれら三者の理解がある？

⇨ただしヘグルンドはハイデガーの名前は出すが、デリダとハイデガーの関係は述べないし、フロイトとニーチェについては名前すら挙がらない。

→この三者の不在は、いわゆる「中期デリダ」に属するとされる1970年代から1980年代に書かれた著作の多く（『絵葉書』、『弔鐘』、『絵画における真理』、『境域』、そして含めてよいなら『散種』も）をヘグルンドが同書で論じていないことと関連する？

→「ラディカル無神論」という枠組みで、デリダの文学的スタイルを实践したテキストの読解に何か新たなことが言えるようになるか。

・上のニーチェ、フロイト、ハイデガーの不在からさらに言語の物質性、すなわち意味の透明な支持体ではない言語という問題も俎上に。本書で重要な役割を果たす「決定不可能性」という概念も当初は「文学的言語」——このような言い方がなおも通用するのであるなら——を扱ったさいに出てきたものだった。文学や言語の問題とあわせて考え、それを『ラディカル無神論』での思考に接ぎ木することで、「決定不可能性」の射程も広がってくるのではないか。

→『存在論的、郵便的』との併読による新たなデリダ理解の可能性？

〔参考文献〕

Jacques Derrida, *États d'âme de la psychanalyse*, Galilée, 2000 [『精神分析のとまどい——至高の残酷さの彼方の不可能なもの』、西宮かおり訳、岩波書店、2016年] .

Martin Hägglund, *Radical Atheism—Derrida and the Time of Life*, Stanford University Press, 2008 [『ラディカル無神論——デリダと生の時間』、吉松覚、島田貴史、松田智裕訳、法政大学出版局、2017年] .

-- “Radical Atheist Materialism: A Critique of Meillassoux,” in *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, ed. L. Bryant, G. Harman, and N. Srnicek, Melbourne: Re: press, 2011: 114-129.

Quentin Meillassoux, *Après la finitude—Essai sur la nécessité de contingence*, Seuil, 2006 [『有限性の後で——偶然性の必然性についての試論』、千葉雅也、大橋完太郎、星野太訳、人文書院、2015年] .